

令和 4 年 9 月 7 日現在

機関番号：37123

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12510

研究課題名（和文）養護者による高齢者虐待未然防止介護状況評価票とコーピングスキルの開発

研究課題名（英文）development of a caregiving situation assessment scale and coping skills for elder abuse prevention to which caregivers themselves can attend

研究代表者

小野 ミツ（Ono, Mitsu）

日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・教授

研究者番号：60315182

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：認知症者を在宅で最期まで介護した家族7人の語りから、介護継続要因として5つのカテゴリーが抽出された。《背負っていたしがらみを捨てる》《深い悲しみへの気づき》《介護の覚悟》《受け入れてくれる人の存在》《社会とのつながり》であった。
認知症高齢者の介護者82名に「要介護者に対する対人距離評価票」テストを実施した。その結果、長い距離をとる人は、介護負担感がある、介護が苦痛であるに有意な関連がみられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知症者を在宅で最期まで介護できる要因は、《背負っていたしがらみを捨てる》要介護者の《深い悲しみへの気づき》《介護の覚悟》《受け入れてくれる人の存在》《社会とのつながり》であり、自尊感情を高めていた。対人距離評価票は、高齢者虐待に要因である介護者と要介護高齢者の人間関係や介護負担感、介護への思いなど介護状況を捉える方法として有効であり、虐待の早期発見、虐待防止に活用できると考えられる。

研究成果の概要（英文）：We extracted five categories of continuing care factors from the narratives of seven family members who cared for a person with dementia at home until the end of his or her life. They were: “Shedding ties that bind”, “Awareness of deep grief”, “Preparedness for caregiving”, “Existence of people who accept you”, and “Connection with society.”

We administered an Interpersonal Distance Test for Persons Requiring Care to 82 caregivers of elderly persons with dementia. The results found significant associations between those who maintained longer distances and feelings of being burdened and/or distressed by caregiving.

研究分野：在宅看護学

キーワード：認知症高齢者 介護者 対人距離 在宅介護 高齢者虐待

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

わが国では高齢者人口の飛躍的な増加に伴い、要介護高齢者数も増加の一途を辿り、養護者による高齢者虐待が増加している。2014 年度の高齢者虐待に関する相談・通報件数は、25,791 件であり、虐待を受けた又は受けたと判断された事例は 15,739 件であった¹⁾。高齢者虐待に関する多くの研究が、虐待の実態把握や虐待事例の早期発見、虐待事例への援助を第一目的とする研究である。しかしながら、研究者らの虐待事例の 5 年間の追跡調査(2006)や発生件数からみて虐待が発生してからの介入による解決は難しい²⁾。高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律が施行されて 10 年以上が経過した現在も、支援によって虐待がなくなった事例は約半数に過ぎないのが実情である。このように養護者による虐待は、介護負担や要介護者や人間関係、経済などさまざまな要因が複雑に絡みあって発生しており^{1),3)}、虐待が発生してからの介入による解決は難しく、在宅介護の継続が困難になることがある。塚原ら³⁾は、在宅介護の継続には、「予測困難な反応」「周辺症状への対応困難」「緊急時のサポートの不足」の阻害要因を「認知症の受容」「周辺症状の介護技術の向上」によって克服していたこと、在宅介護の決断には「本人の要望に添える予感」を体験していることを報告している。また、今福ら⁴⁾は、介護者の介護継続意思には、「介護年数」「訪問看護師の情緒的サポート」「親戚・療養者の情緒的サポート」「介護負担感」が関係していることを明らかにしている。

そこで、養護者（以下、介護者という）による高齢者虐待を防止し介護を継続するためには、被害者の 7 割以上を占める¹⁾認知症高齢者の介護継続要因を明らかにするとともに、介護者が自分の介護状況に気づき対処できる評価表が必要であると考えられる。わが国では虐待が発生してからの早期発見や支援に関する研究や介護の継続に関する研究²⁾⁵⁾は散見される。しかし、認知症の人を在宅で看取るまで介護できた要因と介護者自らが簡易に客観的に自分の介護状態を評価できる方法や尺度は見当たらない。

2. 研究の目的

研究Ⅰ：在宅で認知症高齢者を最期まで介護できる継続要因を明らかにする。

研究Ⅱ：小野ら⁶⁾が作成した養護者が自らの介護状況に気づける高齢者虐待未然防止介護状況評価票（対人距離評価票）の有用性を検証する。

3. 研究の方法

研究Ⅰ：在宅で認知症の人を最期まで介護した主介護者で本研究に同意の得られた 7 名を対象に家庭訪問による半構造化面接を行った。調査内容は許可を得て録音した。調査項目は、要介護高齢者と介護者の属性、介護状況、認知症の人を最期まで在宅で介護できた要因である。分析方法は、匿名化した逐語録を作成し、介護者の介護継続要因を記述した内容を抽出し意味を損なわないようにコード化し、データの類似性や相違性に従ってカテゴリー化した。

研究Ⅱ：調査対象地域は、兵庫県、滋賀県、福岡県である。調査対象者には、調査実施前に認知症の人と家族の会長、高齢者施設長から調査の主旨、調査内容、調査方法、倫理的配慮について説明を行ってもらい、同意の得られた 82 人とした。調査内容は、要介護高齢者の調査内容は、性別、年齢、家族構成、介護保険の介護度、認知症の有無、厚生省の障害老人の日常生活自立度（寝たきり度）、痴呆老人の日常生活自立度（厚生省）、在宅サービスの

利用状況である。主介護者の調査項目は、性別、年齢、介護期間、就労状況、健康状態、介護支援者の有無、介護負担感、介護に対する思い、要介護高齢者との人間関係、及び、図1に示した著者らが作成した対人距離評価票⁶⁾を用いたテストである。「対人距離評価票」は、

部屋の中央にいるのは、高齢者です。高齢者は失禁されています。
どこに居たいですか。その場所にシールを貼ってください。
言葉かけがあれば、吹き出しを描いて、その言葉を記入してください。

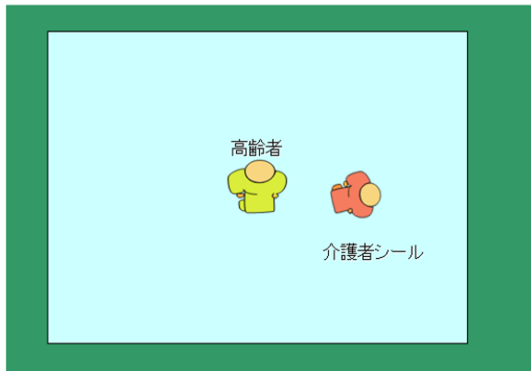


図1 対人距離評価票の例

場面条件を設定した。場面条件は、介護者がストレスを感じ、対応に困る場面である。高齢者の機嫌が悪い、高齢者が失禁している、高齢者は食事の介護が必要である3場面、さらに条件をつけない「高齢者がいる」だけの場面を加え4場面とした。介護者に介護者シールを、もっとも相応しいと感じる場所に貼付してもらうものである。分析方法は、高齢者の頭部の中心と介護者の頭部の中心とを結ぶ距離を測定した。測定した対人距離4場面と介護

者の健康状態、介護負担感、介護に対する思い、介護に対するストレス、要介護高齢者との人間関係などについて χ^2 検定、相関係数分析を行った。データの統計分析は、SPSS Ver. 25を用いた。

倫理的配慮：調査対象者には、研究協力機関や施設および研究対象者に対して、文書と口頭により研究の主旨、方法、研究協力の任意性および撤回の自由について説明し、同意書へ署名を得た。本研究は関西福祉大学看護学部倫理審査委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

表1 対象者の属性・要介護者の診断名

性別	年齢階層	介護期間	続柄	要介護者 診断名
男	80歳代	10年	夫	アルツハイマー型認知症
女	70	5.5	妻	脳血管性認知症
女	80	15.6	嫁	アルツハイマー型認知症
女	70	20	娘	アルツハイマー型認知症
女	60	10	妻	アルツハイマー型認知症
女	70	13	妻	アルツハイマー型認知症
女	70	5	妻	アルツハイマー型認知症

研究I：本研究では、在宅で認知症高齢者を最期まで介護できる継続要因を明らかにした。対象者の属性と要介護高齢者の診断名を表1に示す。性別は男性1人、女6人の計7人であり、年齢は60～80歳代、介護期間は5～20年の平均11.3年、要介護高齢者の診断名はアルツハイマー型認知症が6人であった。分析の結果、認知症者を在宅で最期まで介護した家族の

介護継続要因の構成要素として、13のサブカテゴリー、《介護へのとまどいと不安》《受け入れてくれる人の存在》《一緒に泥水の中を歩けばいい》《深い悲しみへの気づき》《介護する覚悟》《介護について知識を得る》《地域とのつながり》の7つのカテゴリーが抽出された。以下、サブカテゴリーをく、カテゴリーを《》とした。

認知症の人を介護し始めた当初は、誰にも相談できず<戸惑い>手探りで歩く日々が続いた。毎日が<不安>でいっぱい、おろおろしながら泣くこともあった。どこにもぶつけようのない悲しみ、道なき道を歩きながら《介護へのとまどいと不安》でいっぱいだった。そんな中で、同じ介護の悩みを持っている、なんでも聞いてくれる<一人の共感者>がいること《受け入れてくれる人の存在》は大きかった。心と体に背負った過去のしがらみを抱えて一本の綱の上を落ちないように必死にしがみついている自分に気づき、これまでの楽し

かったこと嬉しかったことなどいい思い出だけを繋ぎ合わせようと思えるようになった<諦め人間だと認める>と楽、<背負っていたしがらみを捨てる>ことが出来、気負わずに要介護者と《一緒に泥水の中を歩けばいい》と思えるようになった。介護の意志があっても<頑張る気力だけでは介護は難しい>と気づいた。介護は、きつさ、汚い、報酬は得られない事を乗り越えた《介護する覚悟》がないと自分の欲望に流されてしまう。要介護者をよく見ると動かない身体を必死で動かそうとしている、目の奥で命の核は間違いなく生きている、あなたの世話が出来なくて悔しいと訴えている瞳の奥にある《深い悲しみへの気づき》につながり、いつの間にか介護者は自分が変わったこと<介護者の変化>に気づいた。介護方法について学びたいと思えるようになって、以前、参加を勧められていた認知症の人と家族会に参加するようになった。介護の体験者から多くの事を教えてもらった、また、専門職が実施する介護教室への参加、介護の本などから《介護について知識を得る》ことで要介護者に自信を持って関われるようになった。要介護者に歌いかけながら手の甲をさすると拘縮していた指が伸びるなど変化がみられ、介護が楽しくなった。要介護者の瞳の奥が穏やかで嬉しそうに輝いているように思えた。当初、家族の病について近隣の誰にも知られたくなかった。しかし、地域とのつながりのない閉塞感を感じ、近くの公民館に相談し、誰でも参加できる歌カフェを開設した。このことは家族の病を地域にオープンにすることでもあった。要介護者にとって歌カフェは楽しみの場となり《地域とのつながり》へと発展していった。歌カフェは開設から9年間が経過した現在も地域に根づいている。

介護者は介護をとおして、自分にはこんな優しいところがあったのだと気づいた、家で介護してよかったと介護の満足感と自尊感情を高めていた。その背景として、介護の初期から一人でいいから受け入れてくれる人の存在³⁾、抱えているしがらみを捨てる、介護の覚悟ができる、社会への参加の重要性が示唆された。

研究Ⅱ：本研究では、養護者が自らの介護状況に気づける高齢者虐待未然防止介護状況評価票（対人距離評価票）⁶⁾の有用性の検証を行った。

要介護高齢者は、男性が22人（26.8%）、女性が60人（73.2%）であり、続柄は配偶者が41人（50%）、次いで母親が20人（24.4%）であった。介護保険制度の要介護度は要介護3が25人（30.3%）、次いで要介護4が19人（23.2%）、要介護5が16人（19.5%）の順であった。認知症ありが77人（93.9%）であり、アルツハイマー型認知症が52人（63.4%）、脳血管性認知症が14人（17.1%）、その他が1人であった。認知症高齢者の日常生活自立度では、自立度Ⅳが39人（47.6%）、自立度Ⅲが27人（32.9%）であった。

対象者は、男性35人（42.7%）、女性47人（59.3%）の計82人である。年齢は69.2±10.5歳、介護期間は6.3±5.5年であった。介護者になった理由は、同居していたからが48人（58.3%）と最も多く、次いで介護者の希望が13人（15.9%）であった。就労状況では、仕事なしが70人（85.4%）であり、そのうち10人（12.2%）は介護のために仕事を辞めていた。介護状況では、介護を支援してくれる家族がいるが43人（52.4%）、介護について相談できる人がいる人は66人（80.5%）であった。

介護者の概要は表2に示すように、健康状態では、あまり健康でない、健康でないが23人（28.0%）であった。介護負担感について、介護が非常に負担12人（14.6%）、負担に思うが41人（50.0%）と6割以上が介護負担感を抱えていた。介護に対する思いでは、非常に苦痛が16人（19.5%）、苦痛が50人（80.5%）と9割の介護が苦痛と思っていた。介護をしていて腹立たしく思う時がある61人（74.4%）、暴言を吐く時がある33人（40.2%）、

大声で叫びたくなる 23 人 (28%) と回答していた。

今回、対人距離評価票の有用性について、介護者の介護負担感、健康状態、介護への思い、抱えているストレスなどの介護者の状態が対人評価表にどのように反映されるかについて、介護者が高齢者にとる距離を用いて有用性の検証を行った。その結果、介護者の健康状態

表2 介護者の概要と対人距離

		n=82		
項目		人数	%	対人距離 p値
健康状態	非常に健康	5	6.1	p<0.05
	健康	54	65.9	
	あまり健康でない	22	26.8	
	健康でない	1	1.2	
介護負担感	非常に負担	12	14.8	p<0.05
	負担	41	50.0	
	少し負担	29	35.4	
介護に対する思い	非常に苦痛	16	19.5	p<0.001
	苦痛	50	60.5	
	どちらでもない	13	15.9	
	生きがい	3	3.7	
介護に対するストレス状況 (複数回答)	腹立たしく思う時がある	61	74.4	p<0.05
	大声で叫びたくなる	23	28.0	
	暴言を吐くときがある	33	40.2	
	暴力を振るうことがある	14	17.1	
	その他	5	6.1	
要介護高齢者との関係	非常によい	5	6.1	p<0.05
	よい	38	46.3	
	どちらでもない	31	37.8	
	悪い	8	9.7	

p 値：有意確立 p<0.05

(p<0.05)、要介護負担感 (p<0.05)、介護に対する思い (p<0.001)、介護に対するストレス状況 (p<0.05)、高齢者との人間関係 (p<0.05) に有意差が認められた。介護負担感、介護が苦痛である、暴言を吐くなど介護状況が悪化するほど、介護者が高齢者にとる対人距離は大きくなっていった。介護が苦痛と対人距離に高い相関が認められた。Hall (1966)⁷⁾の相互の親密さが増すほど対人距離は短くなり、相手に不快感をもつと長くなるという考え方と一致しており、対人距離評価票に介護状況が反映していた。

高齢者虐待の要因である介護者の介護に対する思いや介護負担感などの介護

の実態を理解しようとするとき、対人距離という視点から客観的に介護者自らが介護状況をみる事は、介護者が自ら介護状況を捉える方法として有効であり、虐待の早期発見や虐待防止のきっかけになると考えられる。

<引用文献>

- 1) 厚生労働省老健局高齢者支援課、平成 28 年度「高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律」に基づく対応状況等に関する調査結果、
Htto://www.mhiw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/boushi/index.html、2018 年 4 月 9 日
- 2) 小野ミツ、高齢者虐待防止研究の 10 年のあゆみと今後の課題、高齢者虐待防止研究 10(1)、2014、8-16
- 3) 塚原貴子、宮原伸二、山下幸恵、重度認知症患者の在宅介護が継続できた要因、日本農村医学会雑誌、59(4)、2010、461-469
- 4) 今福恵子、田中早苗、坂上朋子、笠井倫代、他 4 名、家族介護者の介護に対する継続意欲と関連要因の分析、静岡県立大学短期大学部特別研究報告書、19、2003. 1-7
- 5) 小野ミツ、高齢者虐待防止の取り組みと課題 認知症高齢者と虐待との関連と家族支援、保健の科学、49(1)、2007、35-39
- 6) 小野ミツ、小西美智子、在宅要介護高齢者に対する養護者の虐待と対人距離、日本地域看護学会誌、6(1)、2003、49-58
- 7) Hall ET, The Hidden dimension. New York:Doubieday(日高敏隆・佐藤伸行訳、かくれた次元、東京、みすず書房、1970

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小野ミツ
2. 発表標題 認知症の人を最期まで支えた介護家族の要因
3. 学会等名 第78回日本公衆衛生学会学術集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐々木 明子 (sasaki akiko) (20167430)	東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・教授 (12602)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------